

大学教員の時空間構造

テーマの概要

- 大学教員の現状
 - 裁量労働制：時間の調整はしやすいが、原則大学に行かなければならない
 - 研究時間：文科省の調査では勤務時間の3割程度しか研究に従事できない
 - 時間の調整がしやすい⇔研究時間がない
 - 空間の調整がしにくい→原則大学に行く
 - 時空間構造を見るべきでは？
 - デジタル技術により研究活動は時空間的に開放されたが、大学にいないといけない
 - ある意味では、縛られた（固定された）空間にいらながらも研究はどうやって行われているのだろうかという解釈が可能である。
 - 大学に留まる理由
 - 学生の安全のため
 - 教員の安全のため
 - 大学に留まることが悪ではない
 - 研究者＞教育者ではなく、研究者＝教育者という関係性で見るべき
 - 一人の人間が1つの空間で2つの役割を持ち活動しているという解釈が可能である。
 - 研究はいつどこで行われているのか？
 - 特にフィールド調査ベースの研究
-

主な視点・理論

- 時間地理学・行動地理学：日常生活の構造を把握
 - 科学の地理学：科学的知識はあらゆる場所で生まれる
 - リヴィングストン『科学の地理学』
 - DIKWの視点がない
 - つまり、どこでデータから知識に切り替わるのか？
 - これも別で研究テーマに出来そう
-

具体的検討項目

- 大学教員の生活行動の調査
 - やってくれるのかどうか怪しい、、、
 - 大学教員のスケジュールを分析
 - 研究時間が週、月、年の中でどのようなタイミングで行われているのか？
-

批判

- 研究活動は空間的に自由であるべきか？

- このテーマの前提的に研究活動は空間的に自由であるべきとなっている
- すべてを満たす制度があるのか？
 - 研究、教育、事務管理業務を適切に管理できる制度を提唱したいのか？
- 大学教員を管理する側の視点がない
- 自己管理不足になるのではないかな？
 - 構造的問題につなぐことが出来るのか